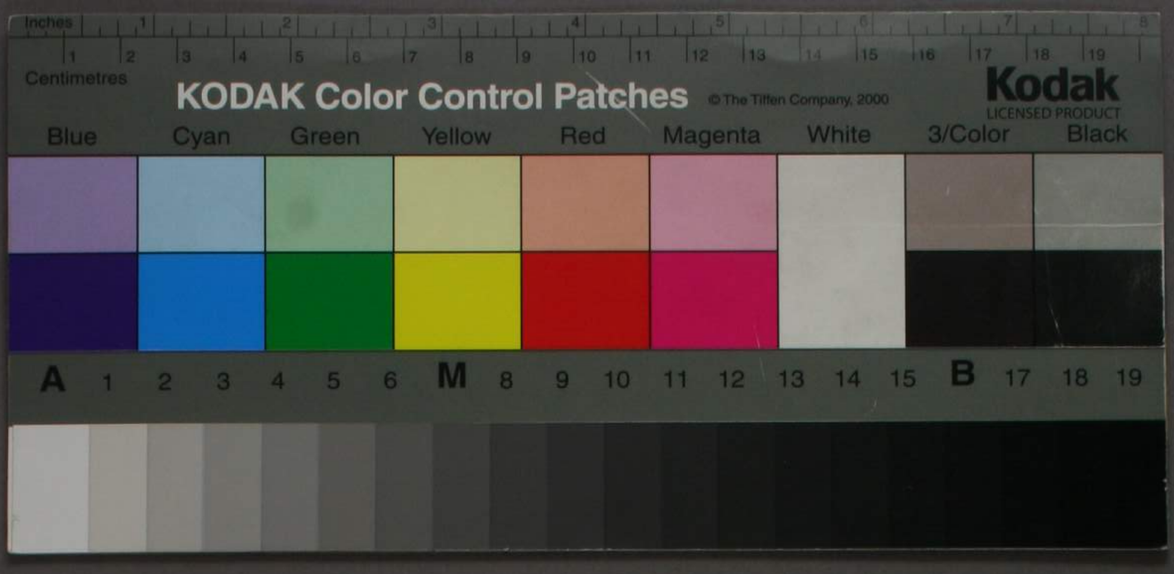

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Inches
Centimetres
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ル 4
1543
10

1543
10

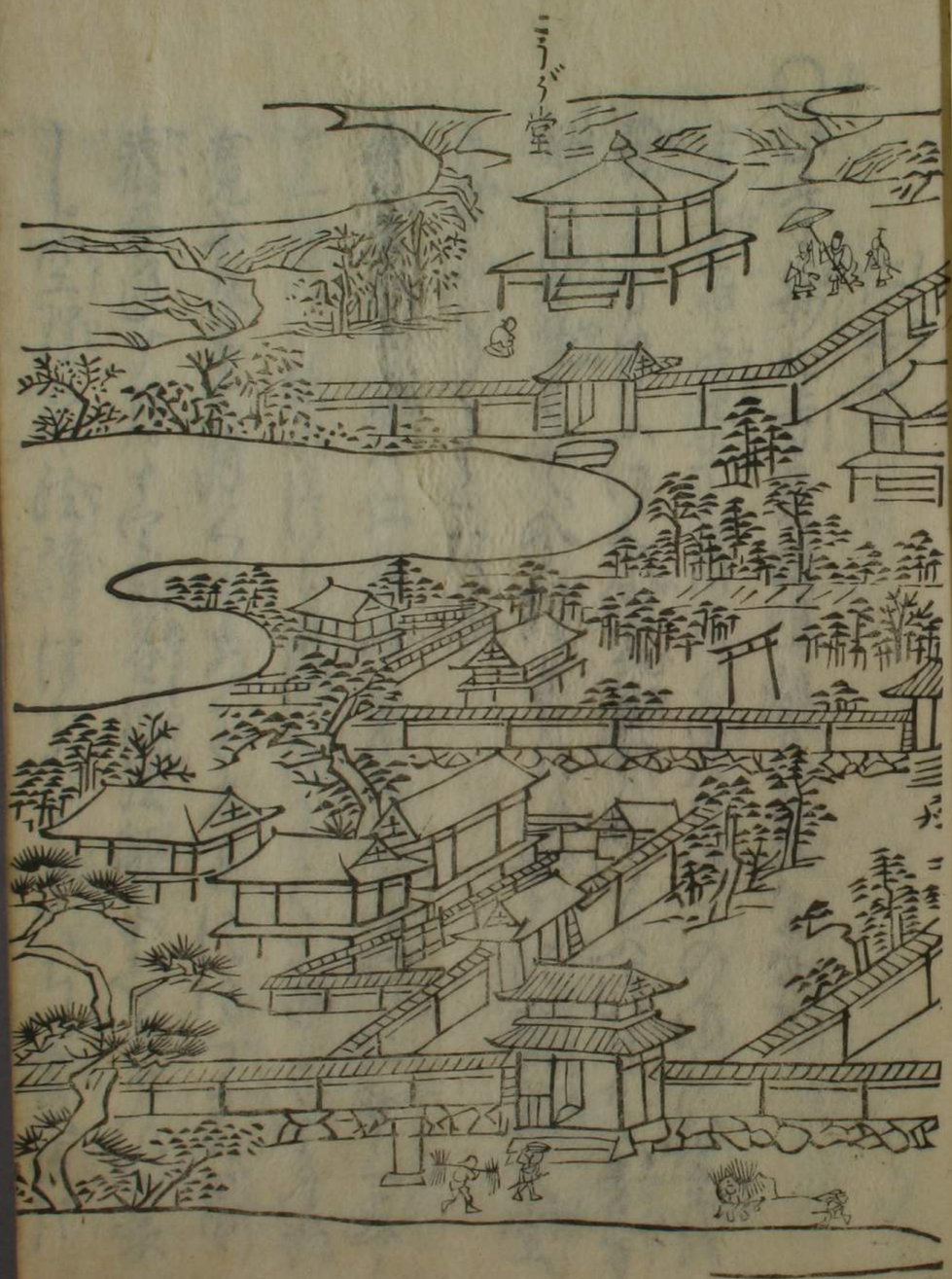
洛陽名所集巻之十目録

仁和寺 弘法堂 大門山
鳴瀧
帯取池
往生院
小倉嶺
清滝川
鹿背山

玉山
砥山
嵯峨
寂光寺
有栗川 水尾
櫻西

妙光寺
遍照寺
三寶寺
師宮
月輪

玉池
廣澤池 坐禪石 鬼石
清涼寺
二尊院
天龍寺
愛宕山


こうぶ堂

仁和寺

仁和寺

○じ寺ハ妙心寺なる西嶋瀧乃東なる
宇多帝。寛平巳酉乃年八月ころの地に宮城
営しゝなり。ゆゑ法皇乃御寺
御ハ奥殿とぞ。今ハ廣殿大堂
うゑおろくゝとたゝうう
寛平皇帝ハ。仁和帝第七乃子なり。仁和ゝ年
十一月に。位ゆずりたゝまふ。同年九月
寛平九年七月ゝ太子に位ゆづる。同
春ゝ三月十日。菩提信法師みちゝの出家
し。空理ゆく法華講はじまる。すなハち手書ゝ

てまつり。太上天皇を奉し。十一月に
戒壇東大寺にうけ。延喜元年十二月東寺
において灌頂を受信にうけ。御室を仁
和寺乃至にて営。祿宴を行ひし
にて。三月園堂を建て。金剛界会を慶雅
阿闍梨を安て。誓言を述て。御
室戒を受。山戒壇院にて大戒を授。命法師
四十五にて。壇上に系金をかけ。
十年九月命につき灌頂阿闍梨位を
受。御林次将藤俊蔭に上詔し給ひ。

命に法眼和尚位を授。上皇をば
開文院さしげ。よって。義平元年七月
九日に薨じたまひぬ。齢五十五に
ておはしましける。

覚空　性信　覚法
覚雲　成典

右五人にて。仁和寺に住居せり
寛空は。文室氏の列の人也。寛平上皇に灌
頂を受け。天暦年中に。村上帝乃勅をうけ
て。たちまちに大僧正にならせたまひ。康保元年
に。僧正位を授。天祿三年二月六日に。おはします
年八十九

性信は。二條帝。当代の高僧。母堂なりしは。朝林
大將軍濟時の女也。ひのやしなひ。ゆめ。あるのく
ら。寛弘二年八月一日に。誕生ありて。まく
仁和寺乃隆信法師。出家し。三のとしく
まく。敏頴なりし。容貌のうつくしく。洞徹
し。勤苦いとなみ。延久二年。太子宮太子
癒し。たまひしに。感あり。玉殿。信に。藥師の法。修せしめよ
さとせたまひく。信に。藥師の法。修せしめよ
しおはしてうり。玉顔さらに。かうとて。兼居
元年十二月十八日に。法勝寺の落慶。導師と
なり。應德二年九月二十七日。彌陀法となり
端居し。遷化。壽八十一
成典は。仁和寺にもうみ。容教法をもうびしし
にのりし。魔魅
般若法誦し。
僧正なり。長久二年十月二十四日に。年七
十八
覺法は。白河帝乃御子なり。仁和寺の覺助に
けり。密法。法。
峯寺に。
法を傳。
見しもなり。我小兒。

悲哀にたゑがたしまくらくさくさくしくさくさくしくさくさくし

○並池　御堂の西よりこゝにぞ
鳴瀧

○是西瀧とく七瀬れ一ところ仁和寺より七八
町を西のくまり
像殿と云のにたる滝の乃あの川せゝみゝだ
せん出るゝ流れ法師等
にぞ〜〜〜〜人めにたゝせけんそ
ハなのゝゝぶにるゝゝたなの川
けゝ西小ちゝも御ゝあり円ぽゝ多さゝき氏
ゆのゝ像るゝく般若とゝの像隙ゝま
てさ西〜れ興ゝゝにぱゝるゝ〜ぞにぞ

けの微矢をくゝくゝ
抛寶ハ花のゝゝゝ
ゝのゝゝゝぞにゝ
作末氏の何のゝゝ
のゝゝて般若寺
く像ひも作ゝ
みよハさゝのゝ
ゝ義滝と乃ゝ
ゝゝひゝ谷水ゝ
ゝゝゝゝ日ゝゝ
なゝゝゝゝ

ぱゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

行をけふとくさげのこころを[illegible]か
くいのくうみ寺そうそうみちひさ
愛平よくかけしかはりうらにぱをた
くにをやうなやうくかんしなどにえ
ゐ人ふうしうるとこのごろぞうう
しゆうるうぱえんれうるくやく
なくくぞうとうるくるくるひうちのか
つくにゐ郡をそぐ兵多ありけふく
わくうるふそ蘭のあるになんといへ
くくこよそやとりうるおげ
掲わ也でまげ月年てくしく紀のれ

排闥減竈の功あを面者ごとけ者
[illegible]
家にくにせむうくいひしうまにた
し右ようけうる危りうげ結くひぬう
くるる遊び。仏ると日を衛西
者る山のくにをうぢはさそで東村搗
ほのめれぬうくて人食ばれ句なく
仏ようる。おうるう乃口そをはくむへく
なうねば八のうくくのべくさわもる
でうるるわくくしめ
林鞋共到雑塵境数取蘭蕙遊別添盤

歸雲孤靈運屐新崖石壁都說驛寺名
般若光清與山唱鳴鵰尚聽音說何義鳳珠
花月宴詩觴伊自坐晴空

○妙光寺　鳴鵰ゝる小ゝ法燈國師ゝ
開基なり
覺心姓ハ常澄氏ゝ紀信列神林縣乃人ゝ
ゝと戸藏山乃佛にいのり燈さげゝるよゝ
ゝ夏乃ゝ紀ゝけしゝこせ千ゝ九ゝ神寂寺
みゝく僧吉ゝ十九乃ゝ難波ゝ東大
寺ゝ受戒ゝ高野山ゝのゝ窟にゝけ

金剛三昧院ゝ行勇にまゝ教外の旨
ゝゝひ又勝林乃頂ゝ建長ゝ
宋域をゝゝ双徑にゝゝ癡絕に孔し
ゝゝ邪の同參源心ゝおひゝゝゝ
靈洞護國佛眼に謁し心即是仏ゝ即是心ゝ
仏如ゝ亘吾亘今ゝ乃偈をゝゝゝ
可ゝけ宝祐三年ゝ帰朝ゝ
仏眼月林語對御錄無門関等ゝ付し又偈ゝ
ゝゝ寫照乃贊ゝ
建長六歲に高野の故居ゝ
金剛三昧院ゝ出世ゝ仏眼ゝ辦香ゝ

ゝ城ゝ人遊書し。至切なり。弘安四年。
邈山院乃詔のゝく。城東乃勝林寺にすみ
永仁ゝゝに諸徒衣資ゝゝぐし。壽塔ゝ都
城乃西ゝにゝて。歳寒く菴ゝなりつけおゝる。
ゝゝめ帰乃ゝゝ。し形ぐゝ墨ゝゝく
その名ゝゝの法乃ゝゝゝ

藤原範永三のぶ位。俊へもなれ山里乃秋の夜
月のすえをさしてかりくる雁家の子うり
廣沢乃池さきはくしの柿うけかりくるふ
くくくく

とゝのゝしくもてなしに儀容さぶらはねば作礼
默許して瞻仰しけるに顔貌のたゞ
ばかりにぞ時に淳祐童おかく
ぞ思ひしに容おのゝきまされ
じ賢祐ぞ心とゝろ定無なりさせけ
るよ。ひざのもと。朝夕暮すしてそれ。ゝかハ
ぶ。思ひしく。鼠ゐくゝたにさぶらひて。諸衆僧
皆ゐるゝたのゝざるとなるもバ後世浮橋の
者のるゝびらゝびひそうんをのゝく名お
ゝくゝ。ぞうゝく射しはゝう。賢和列の般
若寺なりけりもぢめ。延喜十九年

醍醐寺れ座主に似てゝ。ぞの職おゝた
ゝ。延長三年に。僧正やくなりそのゝ六月
十日。遷化しぞ
児石　出禅石れゝゝゝゝ小なる石也が乃
僧都の児かゝ常ゝ居きる下ゝなりゝまる
廣澤乃坤れゝゝに小社ゐ二ゐよハ池のゝゝと
いゝゝなるゝ。せにけゝゝふ。の児僧都にわゝて
そのゝ池ゝ男なれげしゝ下ゝて
○菖取池　廣沢ゝゝゝ東也路のゝゝにぐ
ゝそゝゝにゝゝ。是なゝ。ゝ。むゝ。ゝふゝゝゝ池
れ雲ゐびく化しゝ。ゝんとゝれしゝて

遍昭寺

○けい寺ハ廣澤の乾にあり。今ハその旧跡ばかり
乃こり伝へ聞
本朝語ゑ。良峯サ將宗貞嵯峨天皇の后
うさ名立ーと。帝おぼつかなくぞ思ひ
后ものめ。ーあんぞ我身ー。夜の寢殿ゑ
ふさせ給ハめるに。人ちぢまりて乃ちゑ將
ゑ。ーー。薫のうづまり。衣のもとに
ゑ。月ハかくれたりひかりしハ宗貞を
ゑ。心ふかの色衣ゑ。やはらとゑ
ぞうちなるにしてぞうと伝へ聞

けいこのゑめでさせ給ひたるもいひ給ハ
ぞりーゆへ。ゑ世我ゆ。遍昭こ名ゑ
ゑ。又帝ゑ。ぞーゑ。ゑ時
入道に。ーーもいへ
釈遍昭俗名ハ宗貞門下侍郎良安世ゑ
ゑく。乃ぞ。ーー仁明帝の近
伝ゑ。寵遇ーーーーーて嘉祥
三年三月に帝崩ーゑ。ゑ墓ゑ
ぞ。ゑ。ゑ。雅楽ー慈覚
のゑ。ゑて。ゑ天台の密教ゑ。ゑ
ゑして惣持院ゑ入。ゑ部灌頂ゑ座主圓珍

講式をつとめ朝夕ふるまひ
て元慶之多の僧正となり四光孝帝
の御代の多数百人をぶ
るれいら元慶寺の座主ようぶつ寛平
二年正月十九日より遷化しけるまで年
七十にぞなりぬ
遍照寺の僧正の弟と日本ひつけく
堂のうちにくえはまきて戸をとわけさ
ぶらひをもちて入てとりあらぶ設とのしも入て
たくこめてらんはしこころしけるひ
どくくしくやくくるとぞ草かりわかやて

人をはなちをこの村をのこどもおろかく入
てあるを大庭ともうこめさあるを中に法師ま
しまくかけをもぢうちうしくれはは法師を
うちんでぶらり使庭へ出しうりわうるを
乃をとらびよりけるせくく禁獄をしれる
基俊大納言の別当の時よりうん
けをはしまくうるみうちうのうぶいも
なるこをは僧侶今は訓戒をびしくあく
なるなり

千ぐりし
うめ山
天ぐりし
のくや

あぐご
丹の口
こぐりし
ふくえん
ぎあん
せいぐし

西ゝ
まつのを

嵯峨　佐野の山

○はるの日の洛陽をうちすてゝ二里ばかり西へくだる。上下の二所あるべし。村もまばらにて、いとものさびしくいやしきもゆゑ有ぬべしとかや

長久二年八月松尾の幸行きゝ給ふ。春宮は女房車にて、のぞきてゆかるゝ。のぞきの女房とぞ。ものゝ花をこのゝしくもてはやしけるに、近衛の部ゆくゆくゆかるゝ。ゆかるゝの車のもとにうちうちせくゆゑ、中納言資綱の立のもとにうちまもりてさしよりて、花ゆゑ

權中納言俊忠卿この山にぞくだりよ侍りき
さの野へよりて昔の跡をたずねる所
定家卿この山にぞ住ひおはせし秋のさがけ
居られ庶し草のもとの露よりなほ
この集名おかくの代のいろくのあるな
のめり。詩歌よ入ぬるやまぎるたるる
もなるもけるし
泡じ慶安壬辰乃冬。季の夜下院我師
冷泉爲景朝臣。後光明院乃勅定をうく。
あるたに。要書にのこるらるる
ものも閑窓ものの地なるぞいとく嵯峨山
ましてさもあれうるのもとびあるあ
知還軒こゝにに緣居せられし時ものか
いち陪從しもくのの書きの校訂なるく
仕るもの日夜數首乃詩歌をつくるコアもづ
かくしくるる
奉勅敷攜書案箱櫃
奉天從駕佐國卿
釈堂邊廻野經知還軒經入林塘風鋤深草
雲重色兩洗脩篁月副光詩酒遊情猶寂
離塵眼界自清宣
又小倉山乃麓ハ八幡神社いもとけるな
るそのなるる張殿書校にもるる人

くおもてのくの作をこの紀行をば
けり。朝日もうく
彷彿冥廟前奠酒自飄然攀桂小倉嶺洗耳
大井川心学山似世身静日如手坐煙白上只三
羽化仙
余こゝ韻流れて
攀躋田社前心礼自凄然離俗坐庐阜釣閑
望頴川樹林妄漏日水右不知年永嶺徳猶
部一人包八仙
名乃真ゝを仏のあり。又紀還軒うり
見くくなりて。朝日十景の待るのまも
なくくゝ見れば。数くあるなれど。五絶
鹿岳晴雪　雖瀬瀑瀑　遍照孤松
愛宕雪景　九甚堂晨鐘　情山霊社
尚嶺白梅　仙人白麦　飯　急流芳月
雄蔵紅楓
余が見文法橋文我。ものしひきくもり。雨
興趣はくし。蓋はくし。人ゝ糸れ。ものの
数ゝ。ゝ。ゝ。

清涼寺

○此寺は小嵯峨乃内にくこゝは也釈迦堂にて
こなり。南ひらの堂なるハ毘首羯摩ゞの
けてつくり栴檀なる容や。開山ハ奇然上人
なり

奇然ハもと東大寺におつゝ論議まなびゝ又
密乗にも元某にうけ。永観元年秋渡唐し
ゝ。東大寺にうつゝ書写し清龍寺にもくゝる。
比叡山にも伝を天台山にのぼり使也
さて洛都乃西華門なる聖禅院に住
ゝ乃像を刻し。工張栄

に模刻なさしめたり。大宗然に日域
乃皇系暦祚にうひ給ふ。あるにてくく
ゝへらるゝなり。乃ち紫衣をうけ
なされど辞しさつゝ。堅にのがつゝ。雍熙
三年台州の鄭仁徳の船にのゝ。永延元年よ
かへるゝ然されいち。大蔵経五千四八巻十六
羅漢の画像の優填の像にも
つゝ。此寺にもつゝ。長和五年に寂しゝ

往生院

○此院ハ清泉寺の西。二条院乃小波上皇女にて
ゝ所なり。阿仏尼人ゝ像つゝ

故王故女をひしてハ平相國清盛入道殿
せて。白拍子なりけるを。仏のおとくに
ぐしをさ白拍子なる仏ゆくゆく。本尾お間
へ推参ゆくゆくに入り故王よハゆくゆく
ゆくゆく。故王ゆくゆくと言ハ。ゆくゆく
仏ゆくゆく仏ゆくゆくと言ハ。ゆくゆく
くゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
人のゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
いゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

しゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
陽ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
いゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
出ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
めゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
入道ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
衣ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

くなけれども。相國の亭に来たりぬ
いくばくもなくして。陸奥の国に
下り給ひ乃ち紀伊の国にぞ
のぼりぬる。猶もあくがれ
故郷に戻り給ひ。故女房の伝ハ七ツ
しさるまゝにあはれ
おくらるゝ
法皇も講堂乃ち
少くいまされ
三宝寺
○
此寺ハ二尊院の北隣生院の南一丁也瀧口
入道
瀧口時頼ハ三條衛門大夫茂頼の男小松
大臣の家臣ぞ
建礼門院の女房横笛
よ人
しるべ
ハ
横笛
横笛をとゝ
瀧口入道

ゝそもなをつゝゝん棒ちそのさゝぐ
べ来んゝ祈ゝ祈ぶゝゝゝゝく飲ゝ仏ゝ
能口いゝく貴尼聖やいゝゝ維盛入道
のゝゝゝ。戒師よりけゝゝくゝゝでたぶゝよ
平家物語にゝゝゝ

寂光寺

○此寺ハ二ゝゝゝゝゝすゝゝ賢ゝゝゝゝゝ
宗家ゝゝゝ所色低の祖ゝゝ乃生一ホやしてハ
日蓮宗の寺なり
黄門定家ハ。五条三位俊成の男なゝの中奥
なり。母ハ前右京大夫親忠ゝゝゝゝゝ。悲係

二ゝゝ。誕生四条院仁治二年八月廿日正三位
中納言ゝゝく。京ゝゝ。歳七ゝゝ法名ゝ静ゝ名
季ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。新古今選者の中ゝゝ
一人なり。新勅選ハ。ゝゝゝ独選や

二尊院

○此院ハ釈迦堂の西也。ゝ阿陀釈迦乃二仏ゝり
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ是ニ川新ゝゝ
或時藤桐図画賞ゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

法華堂にくこいわまりうそぐうとといまてゆき
墨像の是はうさうへなりとなりたるはうを
世の新とそいて
ちうさは二条振殿康道公乃ゆ。是川乃山
をのとれたうをきんなりくしうはしのし
うのう

小倉嶺

○はしの山ハ二尊院のうしろ
紀貫之ゆのに夕日をとうれ山はなく庶
乃是多かんしうやあれもうれん定家卿ゆの

にゆ小倉山はのあらしのおとくさのいろ
もうにはあれぬ家ゆ又西山法師雄花山集
乃是にまを家ゆ猟ゆくはとうれ

やうあり

後鳥羽院。

さいのうゆにゆふ乃をけふはるま
ひてでもせらもうしてゆ　おうく物ゆ新ハ
わをぜハの未乃をえまぢうくけゆう
にうざうふとうゆ。慈鎮和尚
あくをしとやうゆ。慈鎮和尚
まうりうもぞ

野宮

○けい宮ハ天龍寺より西小西二そ屋ゝの道なり。
ちいさき小社なり。鳥井小笠懸。ともその
ゝかのもと事なり。
野宮ゝ
水事あり。ゝ宮ゝ
よ。備中ゝ
ト宮ゝゝ。ゝて斎院へ入給ふ。
明年野へ入給ふ。又明年
伝勅へ入給ふ。
ゝゝ羽三ゝ八月

御ゝ伊勢の事。延喜式ゝ神やゝ鳥居
勢ゝゝ乃ゝ
賀茂ゝ伊勢ゝの野宮ハ北野ゝ

有巣川

○けい川顕昭云。伊宮ゝ斎院のゝゝ
ゝ行ゝ小川なり。
京極摂政殿 松枝映水 と紅葉のくゝ千ゝ振
伊の宮乃ゝ
ゝゝ引へ
或説ゝ秦大ゝ注輪寺へ系ゝ乃ゝ小川

をいつやさまに清流の川辺に川をい
行くいつそと船恒にとつせ引へば いさとて
こはゆ〇いさとにて菓川 右の川辺成しこれ
みめ少しうるわしき
又説に有菓川といひ形ちさらへ下清流の
川の鰐といふ主ふをまんりうにあり小川城云
伝へたり
私曰野々宮へ出る。藪柳わり。十間の小川城
いつるやいい
水尾
〇けい所はいりくどへ川
りみち。堂ちと寺ち

天龍寺

〇此寺は大井河のほとりにあり
長慶院殿の御願にて矢室九世孫なり
母親音にいつ乃ち。転生
ゆえにくそのまくちとなり
歳のく母よりくまで五歳の時。手指数完よりくこと
種山ちばらく。十歳乃時。七日法華経と通し。母親
よ龍ーこづくく母の孔雀九変の相とあらしく。懐生
ゆ。おらし。人こつくち。懐となる高僧師の禅
興戒をうけ。三年の間願寄乃数となりひと。
行を大乗に教化くそくびらく。懐ばたく

而田畑を世話求めまして新満の日をくれ度申
候ばかりにて多くの人夫ひとくくに一傷負申候
ひとつづつ入ると雖石頭ともに内一人死亡
ひとへにて一世と長谷寺わたくしの
ひとつ一人死亡ひとつ
地蔵尊の霊験ハ実に関西
天皇陛下ハ御信仰なし特に長谷寺の開山祖と紀州
[illegible]

清滝川

けハ川ハ愛宕のふもとや
愛宕のもとをぬけ川のくり坂
雖しぶくく信仰なるなり
後成ゑ寺に石もめぬ月数
てきる滝川ハ水乃きよ水ハ
西山法師ぶりに高雄みて雪しけ
くり清きこの川の流れ波
傷ましき意ぐるくけるや水ぶん
清滝川乃せゝのきらと

月輪

○は寺は。愛太子のうつしの靡也。大政大臣兼實卿
剣建の。名の相國の新ぼ兵部卿殿の古歌あり
しぞ。拾遺はさしも乃目にはしみゆく
きふは悩よくひろふなりけるぽうしうこの
小なる

櫁原

○は一歌は阿太郎公のうつしや
曽祢好忠のにて。山ちかきこゝにて
雪はふる。花はむ人の折ぶみ。又雪
うゝ。遠の雪は人新にもあらぬ
櫁の原よりふれる雪

愛宕　愛岩護　阿太胡　愛太子

○は歌は。清涼寺の乾乃山せは。清軍地藏菩
薩十三ヶ所の内の四羅を。雲也。三堂。大師堂
大師大宮。中小沒代の者。小角。雷を。遍上人。
両雷。七歳龍樹。高楼那。異人。深なり。
二人。兄弟。は。天晴。も。有。ぬ。
奏し。沙。高は。はしら。よ。潮。
慶俊。姫は。藤井氏。の。人。なり。道意
にけり。人て。空。代。
寺にも。愛宕山。を。第一也。
天應元年。僧都。

このゝく貪瞋病はなをひとつやゝ
秋長立のに。ゝ石のゝ高尾のゝといひそゝ
人ゝ愛宮ゝ山ゝ墓ゝやゝのゝもんゝくゝゝ
いゝゝへゝ高尾山といひしゝゝ始し
ゝゝのゝ也
釈仁徳ゝ南京乃人なり。又毋伽藍神にい
のゝゝゝゝけしゝゝゝ九歳のして東大寺
にいゝゝゝ。教法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ戒
律をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ苦もゝゝて。坂
愛太ゝ山にゝゝゝ。伽藍ゝゝゝゝ師子
白象ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ侍

水云風のゝのゝゝ白波千日酒ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ